

## 編集後記

熊野古道・大雲取越えの歌人たち——

輿の中でずぶ濡れを嘆いた藤原定家と土屋文明、斎藤茂吉

今年、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界文化遺産登録20周年。和歌山・奈良・三重の3県にまたがる広大な紀伊山地に形成された3つの山岳霊場——修験道の拠点である「吉野・大峯」、熊野信仰の聖地「熊野三山」、真言密教の根本道場「高野山」は、それぞれ異なる信仰の霊場だが、参詣道「大峯奥駈道・熊野参詣道・高野町石道」で結ばれ、日本古来の自然崇拜に根差した神道、中国から伝来し、わが国で独自の展開をみせた仏教等が融合した独自の神仏習合思想が形成された。

これら「紀伊山地の霊場と参詣道」の文化資産群は、2004年、国際的な判断基準に照らして、「顕著で普遍的な価値」を認められ、「他に類例のない日本の宗教文化が千年以上にわたって発展してきたことを示す貴重な遺産」と評価された。国内外から多くの観光客、巡礼者が訪れている。

巻頭言を御執筆下さった旅行や登山を愛する齊藤誠先生から、「12月に、那智から小口、熊野本宮大社と、中辺路を歩こうと思います」との連絡をいただいた。

熊野那智大社から、その北の那智山や標高966mの大雲取山を越えて旧熊野川町・小口に至る「大雲取越え」、小口から標高610mの如法山を越えて、請川に至る「小雲取越え」を経て熊野本宮大社に到着する。

「雲取越え」は、熊野三山の参詣道、熊野古道中辺路の派生ルートの一つで、通常は、本宮大社から熊野川を船で下って、新宮の速玉大社に詣でた後、陸路で那智大社に詣でるが、修行者や庶民らが、険しい山間部を縫って、那智山と本宮を結ぶ道を開き、後に熊野詣の巡礼者や旅人にも定着した。熊野古道最大の難所かつパワースポットである「大雲取越え」は、その名のように、雲がつかめるほどの高くて峻険な、雲の上の道である。標高883mの舟見峠からは、熊野灘の広大な海、航行する船…大パノラマが広がる。

かつて、この「大雲取」を歩いたことがある。全然、山好きでもないのであるが、県内各地に建てられた詩歌の石碑を紹介し、解説した県の出版物『紀州おもしろブック——いい碑 旅だち』の編纂のため、掲載する写真を撮るのが目的である。必要な写真は、標高848mの越前峠に建つ文化勲章も受章したアララギ派の歌人、土屋文明の碑など数点。

カメラマン氏含め3名で、小口の駐車場に車を止め、登り始めた（全員、初めてである）。ほどなく、苔生す大岩に梵字を刻んだ有名な「円座石」（ここに、熊野三山の神々が座って談笑したという）があるが、この辺はまだ麓。山中で遇った地元の人に、「那智から来たのか？」と聞かれ、「小口から」と答えると、「ええっ？」と驚かれた。（普通の古道歩き初心者は、傾斜の緩やかな那智側から登り、急な下り坂を経て小口に至る）

途中、「胴切坂」などという恐ろしい名の上り坂が続く。60°位傾斜があるのではないかとさえ感じるほどの急勾配を、使命感に燃えたカメラマン氏は、驚くほどのパワフルな足取りで登るが、わたしなどへとへとで、足が上に持ち上がらない。横からはずみをつけて振り上げるようにして登ったのを覚えている。

そして、何とか、越前峠にひっそりと佇む「土屋文明の歌碑」に辿り着いた。刻まれた歌は、

「輿の中 海の如しと嘆きたり 石を踏む丁のことは伝へず」

この歌は、建仁元年（1201）、後鳥羽院の熊野御幸に随行した歌人、藤原定家の日記『熊野道之間愚記』（後鳥

羽院熊野御幸記)を踏まえたものである。

定家は、「…終日、陰阻を越す。心中は夢の如し。いまだかくの如きの事に遇わず。雲トリ紫金峯は手を立つるが如し…」と記した。大雨の中、那智を出発した院一行の列。定家は、笠を被り、蓑を着て、輿に乗っていたにもかかわらず、輿の中でずぶ濡れになり、本宮に着いた時には、前後不覚になった、今までこんな苦しい事に遇ったことなく、悪夢のようだと大雲取越えの厳しさを嘆いた。

大正14年(1925)、土屋文明は、8歳年長の歌人、斎藤茂吉を大雲取越えに案内した(熊野に魅せられたのか、文明は計4回、熊野を訪れている)。

その折、茂吉は、険しい道を「紀伊のくに 大雲取の峯ごえに 一足ごとにわが汗は落つ」と詠み、

文明は「大雲取越えて苦しみを残す二人 定家四十 茂吉四十四」、

「寒き雨に 咳きつつ越えし定家知らず 汗たらず茂吉は我が目に見たり」と、定家と茂吉を歌に詠んだ。

碑に刻まれた彼の歌では、(大雨の中の大雲取越えで、定家はずぶ濡れになったと嘆いたが、)定家が乗った輿を担いだ丁(人夫)のことは…?と、やや皮肉も感じられる。

写真撮影も済み、帰りの小口への下り道、上りは苦勞したわたしは、下りは、まるで修験者のように山を駆け降りたというと、大げさだが、大変足取り軽く降りることができた。ところが、そうでない人がいた。あんなに行きは快調であったカメラマン氏は膝の具合悪く、しゃがんだ姿勢で降りたのである。そんなことを知らないわたしともう一人は、登り口の自動販売機のジュースを何本もおかわりしながら、彼が降りてくるのを待ったのであった。

(谷 奈々)

21<sup>世紀</sup> Wakayama Institute for  
Social and Economic Development  
WAKAYAMA

VOL.  
108

発行 2024年12月11日

編集発行者 一般財団法人 和歌山社会経済研究所  
〒640-8033  
和歌山市本町2丁目1 フォルテワジマ6階  
TEL 073-432-1444(代) FAX 073-424-5350  
<http://www.wsk.or.jp/>

印刷 株式会社 さかぐち昇和印刷

無断転載・複写を禁ずる